やってます 私たちの自主防災組織

市内で活動中の自主防災組織を紹介します。
組織づくりの参考にしてください。

恵まれた土地柄で、危機感がない
自分のこととして、とらえてほしい
小寺南1組町内会

小寺南1組町内会は55世帯が加入している自主防災組織です。平成19年4月から活動を始めています。

市の補助金を利用して、水に濡れても音の出る笛や、血液型や連絡先を書ける首掛け式の救急カード、担架といった必要な防災用品もそろえました。また、町内の住民情報の収集も行い、要援護者の把握や、市の洪水ハザードマップを使って話し合った全員集会も開きました。

「総社は、大きな災害の経験が少なく、恵まれた土地柄で、危機感がないと思います。しかし、いつ災害に遭うか分かりません。自分のこととしてとらえてほしいと思っているんです」。会長の吉富勝さん（小寺）は、日ごろから防災意識をもつことが大切だと強調します。また、「防災に対し、町内で同じ意識を高いレベルでもてるようになれば」とも。そのため、リーダーからの押し付けでは、理解度も上がらないので、集会では問題提起をし、討議をする方法を採用しています。

町内で長年続いているイベントを通じて、つながりを深めている小寺南1組町内会の皆さん。吉富さんは、このことをこう表現します。「自主防災組織は、人と人とのつながりが大前提です」。

7月17日、備中県民局で自主防災組織をテーマに開かれた協働推進会議で小寺南1組町内会の取り組みを発表する吉富勝さん

笛と救急カード
笛は、所在を知らせるためのもので、水に濡れても音が出る。全戸に配布した。救急カードは、万一のときに必要な血液型やかかりつけの病院、連絡先などの情報が書き込める

防災連絡網や資材を整備
防災への道ができた
上原地区会

上原地区会は平成19年6月、町内会活動のなかに防災の取り組みを加えました。

きっかけは、町内会の電話番号簿のリニューアル。市の補助金も使い、防災情報を加えた冊子「上原地区防災連絡網」の作成と、災害時の初期消火に使う消火器4本を町内に設置しました。冊子には町内82世帯の住宅地図に加え、この消火器や消火栓のある場所も示されています。

町内会長を務める渡辺聡さん（上原）は、「防犯や道・溝そうじなどの活動と防災活動につながりをもたせながらしています」と言い、自然な形で防災意識を町内に浸透させるよう意欲的な工夫をしています。

万一のときの連絡体制も、町内会の組織を基本に、会長や区長などそれぞれの役割が決まりました。「幸いにも被災した経験がなく、ゼロからの出発でしたが、市の補助金を利用し、いくつかの必要な資材もそろいました」。渡辺さんは、防災の取り組みに道ができたと言います。

市の補助金を使って、町内に配置した消火器について話す渡辺聡さん

上原地区防災連絡網の冊子
必要な情報を簡潔にまとめている

防災の資材や情報をどう共有し活用するか
横のつながりが大切
中須加町内会

市街地に近い中須加地区。ここに、185世帯による自主防災組織が発足したのは、平成19年2月でした。

「火事、地震、風水害に備え、初動をきちんとやろうと言って始めました」。会長の杉生了亮さん（門田）はきっかけをこう話します。組織の発足後は、消火訓練や防災の啓発活動に取り組み、ハンドマイクや消火器などの資材の購入もしました。

啓発活動は、多くの人が集まる地区の運動会や清掃日に実施。運動会では、知っておいてほしい防災知識をクイズにして、楽しみながら学べるよう工夫をしています。

「でも、まだまだです」。役員の一人、荒木弘一さん（門田）は、もっともっと各自に防災を自覚してもらうことが当面の課題と言います。さらに、「ハンドマイクや消火器を、災害時にすぐ使えるようにするためにはどう保管するか、把握した援助の必要な人の情報を、どう共有し管理するか」とも。横のつながりがもっと深まれば、こうした課題も解決するのではと、他の役員も口をそろえます。

自主防災組織について話す中須加町内会の杉生了亮会長（右から2人目）や、荒木弘一さん（右から3人目）ら役員の皆さん